

# 陶邑窯における須恵器の変遷について—7 世紀を中心に—

佐藤竜馬

## 1. 「私の陶邑編年理解」

大阪府陶邑窯跡群出土須恵器の編年には、森浩一・田辺昭三・中村浩三氏による編年案が示され、利用されてきた。近年では、佐藤隆氏による再検討も試みられている。

地方において須恵器の編年的位置及び年代観を検討するに当り、現在でも陶邑編年が重要な指標となっている。しかし検討する者の多くは、田辺編年と中村編年のエッセンスを組み合わせることによって、いわば「私の陶邑編年理解」としてイメージ化して眼前の資料との比較に取り組んでいる、というのが偽らざる事実なのではないだろうか。その理由は様々あると思われ、今ここで詳説する余裕はないが、あえて端的にまとめるとすれば、3氏編年の様式構造や型式組列への説明が意を尽くした内容に必ずしもなっておらず、そのことによって利用者の解釈を生む余地が生じているためと考えられる<sup>註1</sup>。かく言う筆者も、陶邑編年を前提にして讃岐地方の須恵器を把握しようとしたことがあり<sup>註2</sup>、その際の根拠は経験則をプラスした「私の陶邑編年理解」（中村編年を換骨奪胎して田辺編年に適合させる）であった。この時点では、解釈の幅はあるものの陶邑編年を構成する「型式」を、変更不要な枠組みとして捉え、運用することができると考えていたのである。

1990年代後半、古代の土器研究会による平安学園所蔵陶邑窯出土須恵器（主に7世紀前後）の見学会に参加し、①TK 217号窯のたちあがり付杯身が比較的太く長いたちあがりをもち、底部の回転ヘラ削り調整が広範囲にわたること、②TK 46窯出土資料にたちあがり付杯身（小口径でたちあがりが短い）が少数ながら存在すること等、「私の陶邑編年理解」とは異なる所見を得ることができた。また同じ頃、愛媛県の大小谷谷窯跡や駄馬姥ヶ懐1号窯跡等の知見（あくまで報告書を介してではあるが）に接することで、陶邑窯とは異なる様相として讃岐や瀬戸内地域の7世紀の須恵器を捉える可能性を考えるようになった<sup>註3</sup>。

2020年から、7～9世紀の讃岐の須恵器を実見し、特徴を把握する作業を継続している。具体的な様相が明確になるにしたがい、陶邑編年との差異をどのように理解すればよいのかが気になりだした。つまり、①差異を地域色として捉えるのか、②陶邑編年の枠組み自体を問い直す契機と捉えるのか、ということである。現段階では、①・②のいずれかを選ぶのではなく、両者を往復しつつ、検討を深めることが肝要、と私考している。そこで2023年8月、再度、平安学園所蔵資料、特にTK 217号窯跡・TK 46号窯跡出土資料について集中的に実見させてもらい、いろいろ考える機会を得ることができた。資料の実見にあたり御協力とアドバイスをいただいた本吉恵理子氏（龍谷大学付属平安高等学校・中学校）・鈴木茂氏（野

洲市文化財保護課）に、まずもって感謝申し上げたい。

## 2. 1窯＝1型式・1様式なのか

資料を実見しながら自問していたのが、「これらの資料に時期差（年代差）はないのか」という、古くから繰り返されてきた問いである。田辺昭三氏は、自らの編年案に対する「窯式編年」という批判に対し、「同一窯跡出土の須恵器を一型式として扱うような馬鹿げた方法をとっていない」と切り返している<sup>註4</sup>。とはいえ、一つの窯の出土資料の中から、どのように型式を抽出したのかについては、明言されておらず、我々は『陶邑古窯址群Ⅰ』（以下、『Ⅰ』）や『須恵器大成』（以下、『大成』）での田辺氏の簡潔な記述から類推する外に手立てがない。

7世紀代の編年で最も焦点となるTK 217号窯跡出土資料で、このことを整理してみよう。同窯を標識とするTK 217型式は、以下のように記述される。

- 1) 同型式が所属するⅢ期は、「宝珠つまみと高台の出現」を指標とする（『Ⅰ』11頁第1表）。
- 2) 「Ⅲ期初頭の型式としてTK 217をあげたが、この型式とTK 209型式との関係については、なお検討が不十分である。TK 217の前に、1型式を加えるべきかもしれない」（『Ⅰ』54頁）。「三つの画期」の項でのべたように、第2の画期がクローズアップされてくれば、この時点の型式編年はさらに細分を要求されるだろう。われわれはTK 75・76・119号窯<sup>註5</sup>などの須恵器を過渡期のものと考えている」（『Ⅰ』58頁注29）。
- 3) 「TK 217型式の杯には高台付のものが一斉に出現し、蓋には宝珠つまみと口縁部の内側にかえりとがつく。（中略）初期の高台は体部に比較して全般に大きく、外方へふんばっている。宝珠つまみは文字通り宝珠形をなし、丁寧に調整されている」（『Ⅰ』49頁）。「蓋の宝珠つまみと杯の高台とは、いずれもTK 209型式に先駆的なものがみとめられ、Ⅲ期以後爆発的に普及する盤・皿類のうちのあるものは、すでにTK 43型式に存在するのである」（『Ⅰ』55頁）。
- 4) 時代が下るにしたがって、高台はふんばりをうしなって小型になり、宝珠形つまみは次第に扁平化する。しかも、蓋の口縁部は端部を下方へ折りまげただけで、内面のかえりは消失する」（『Ⅰ』49頁）という記述は、Ⅳ期のMT 21型式に至るまでのⅢ期の変遷について言及していると捉えられる。
- 5) 上記1～4の記述の15年後には、「高蔵209型式に続く型式は、高蔵217型式である。この型式は、須恵器各型式の中で、先行型式と

の差異が最も甚しい。まず、器形の種類とその組合せは一変し、各器形ごとの形態変化もきわめて顕著である。これまでの型式中、葬祭供献用の器形（中略）はいずれもほとんど姿を消し、代って盤・皿類、長頸瓶、平瓶など供膳用の器形が中心となる。また、鉄鉢形鉢や托杯などの新器形も現われる。在来の器形の中で、杯は蓋に宝珠形のつまみが付くようになり、いわゆる古墳時代タイプの終末期の蓋杯を上下逆にした形態に大きく変化する」（『大成』42頁）と記述され、高台付杯身への言及が見られない。ただし同書の別の箇所では、「7世紀前半以降、須恵器の杯に高台の付くものが登場してくる」（『大成』20頁）と記されているため、田辺氏の想定年代（『大成』43頁「須恵器年表」）の7世紀前半＝TK 217型式に高台付杯身が出現したとみる点では『I』からの変化はないようである。

ところで『I』と『大成』では、図示されたTK 217号窯跡出土資料に、若干の差異が見られる。『I』で掲載され『大成』で省かれた資料として、高台付杯身（3、同書での報告番号）、無高台杯身（6・7）、かえり付杯蓋（17・22、後者は焼台転用）、かえり無杯蓋（19）、無高台碗（29）、口頸部直立の甕（38）がある。『大成』で省略された理由は不明であるが、3・6・7・17・22は別の同等資料で代替されたための省略、38は掲載スペース上の理由による省略が考えられる。一方、かえり無杯蓋（19）は、他に類品がなくスペース的にも掲載可能であったと思われるが省略されており、『大成』でその内容が示された後続のTK 46号窯跡出土資料の杯蓋が、全てかえりを伴うものとして示されていることから、TK 217「型式」としてはふさわしくないと判断され削除された、ということなのではないだろうか。逆に、MT 21号窯跡出土資料では、『大成』で新たに高台付盤（21、『大成』での番号）、大型杯蓋（22）・高台付杯身（24、高台付鉢）、ハソウ（23）、甕（25）が追加され、代わりに『I』の図示資料が多く削除されている（いずれも類品は図示）ことから、『大成』での図示に特徴的な器種や形態を適切に示そうとした意図は、読み取れるのではないだろうか。『大成』での各型式の説明文に「高蔵217型式〔測12〕と表記され、型式名と実測図を対応させていることから、『大成』編集の基本方針はうかがうことができる。

以上を踏まえ、『大成』実測図（12）掲載の個別資料を、一応はTK 217「型式」の構成要素と見なすとすれば、その説明がなされた『I』観察表の記述も参考にすることができよう。以下、列記する。

- 6) 高台付杯身の特徴は「底部と体部との境界屈曲部は丁寧にヘラ削りし、削りの上部限界は鋭い稜をなす。高台は厚く外方へふんばったもの(5)と、下方へ垂直にのびる高台の端部のみ、極端に外方へ屈曲し、先端を単に丸くおさめたもの(3・4)との2種がある。両者とも杯部にくらべて高台が高く立派で安定感をもつ。後者は初現期の高台と考えてよいだろう」とされる（『I』72

頁観察表）。

- 7) かえり付蓋は、2者（『I』では「蓋B」「蓋C」）認められ、蓋Bの特徴は、「天井部中央に乳首形のつまみがつく。口縁部にちかく内面にかえりをもつが、かえりは口端部よりも下方へ突出している」とされる。また蓋Cの特徴は、「天井頂部に、やや扁平な宝珠形つまみがつく。天井部は一段高くふくらみ、ふくらみの部分をヘラ削りして、平らに仕上げている。口縁部内面にかえりをもつが、かえりの先端が口端部以下に突出することはない」とされる（『I』72頁観察表）。蓋Cの方が「もっとも普遍的な型式」とされる。
- 8) たちあがり付杯身の特徴は「たちあがりは内傾し、非常に低い。底部中央がやや尖っているのは特徴的である。TK 209杯に同形のものがある。小型化がいちじるしい。たちあがりをもつ杯身の終末にちかい形態」とされる（『I』72頁観察表）。また図示されるように、受部直下の広い範囲の底部外面に回転ヘラ削りが施される。

長くなったが、以上のように整理できるとすれば、TK 217型式の蓋杯は、

- i) たちあがりを伴う杯身とそれに被さる蓋（古墳時代タイプ）、つまみとかえりを伴う蓋と無高台の身のセット、つまみとかえりを伴う蓋と高台付の身のセット、の3者からなる。
- ii) 古墳時代タイプの蓋杯は、小型化が進むが、外面の回転ヘラ削りはしっかり施される。
- iii) かえり付蓋は、かえりの突出度や天井部つまみの形態から、明確に2者（「蓋B」「蓋C」）が存在する。
- iv) 高台付杯身は、高く外方に踏ん張る高台を伴っており、高台の形態には2者存在する。

という内容をもつことになる。まさに「宝珠つまみと高台の出現」が指標とされていることを、再確認できる。「宝珠つまみと高台の出現」という指標は、田辺氏より先行する森浩一氏の編年案で明確に示されている（Ⅳ型式前半）ことから、1960年代当時におけるある種の共通理解であったと見ることもできるかもしれない。しかし、古墳時代タイプの蓋杯は、森氏はⅢ型式後半をもって終わり、Ⅳ型式前半での継続を想定していないように見えることから、「宝珠つまみと高台の出現」以降での古墳時代タイプの継続は、田辺氏がTK 217号窯跡の調査を通じて得た、新たな所見なのであろうか。この所見は、後続する中村浩氏の編年案では継承されていないように見える（中村氏Ⅱ型式6段階とⅢ型式1段階の分離）が、「旧様式が、新型式の段階に遺存することが考えられる」として、Ⅱ型式6段階とⅢ型式1・2段階との重複を想定している<sup>註6</sup>ことに留意しておく必要はあろう。

田辺氏の設定したTK 217型式を、現在の他の土器編年と突き合わせると、どのように見えるだろうか。

中村編年。TK217号窯における古墳時代タイプの杯身は、底部の広い範囲に回転ヘラ削りが施されており、実見した範囲では回転ヘラ切り不調整



のものがごく僅か（1点確認）にとどまる点で、「ヘラ切り未調整のものが多く」なる中村編年Ⅱ型式6段階とは異質である。たちあがり径10.2～10.7cmで受部よりも上位に比較的長く延びる形態は、「蓋・身ともに口径が10cm未満」となり、「たちあがりの消滅が如実に現われており、とくにこの段階の終りのたちあがりは、口縁端部をわずかに内傾させた如くの、極めて形骸化したものになっている」というⅡ型式6段階の特徴ともずれるように見受けられる。たちあがり径以外の属性は、むしろⅡ型式5段階と共通している。また、高台付杯身は、中村編年ではⅢ型式2段階からの出現とされており、古墳時代タイプ蓋杯とは一定の時間的隔たりとして捉えられていることが分かる。

飛鳥地域における西弘海氏の編年案（西1978）。古墳時代タイプ蓋杯は飛鳥Ⅰ、かえり・つまみ付蓋のうち蓋Cと高台付杯身は飛鳥Ⅲ、蓋Bは飛鳥Ⅰに、それぞれ位置付けられる。1990年代以降の飛鳥編年の再検討・微調整を経ても、この位置付けは大きく変わることはないであろう。

筆者がTK 217号窯跡出土資料を実見して、「これらの資料に時期差はないのか」と思ったのは、中村編年・西編年の刷り込みがなせる業であった。ここではいずれの編年案が妥当なのかを論じるのが目的ではないので、立場の異なる見方があるということを確認するとどめる。

もっともこの齟齬には、基軸とすべき器種（器形）の選択による食い違いも内包されていると思う。それは、古墳時代タイプ蓋杯と、高台付杯身について言えることであり、前者は古い型式からの連続関係、後者は新出の器種ではあるが出現期の様相が十分には明確化していないため、定型化した8世紀から逆に遡上して捉えられているようなところがあるのではないだろうか。起点の異なる両者の間に時間的空隙ができるのは、ある意味で不可避ともいえ、好条件に恵まれた一括資料で共伴関係の有無を押さえる必要があることは言うまでもない。

また、上記2者の変遷が、古墳時代タイプ蓋杯の場合は消滅に向っての縮小化・省略化・粗雑化の傾向を明確化するのに対して、高台付杯身の場合は出現期の多様で不定型なものから定型的なものに収斂していく、という異なるプロセスをたどることに注意が必要であろう。あくまで一般論だが、前者がその過程において多様化の傾向を明らかにするのに対し、後者は逆に差異を狭めて定型化していく（規格の多様化は進行するが）と見られるからである。規範が緩む過程と、規範が確立する過程とでは、個体差や多様性の理解も異なるのではないだろうか。

加えて高台付杯身には、未報告資料の中に図示されたものよりも高台が低く、TK 46型式やTK 48型式に近似したものが一定数存在している。『大成』では削除された、かえりを伴わないつまみ付蓋（田辺氏の分類では「蓋D」）を含めると、①TK 217号窯跡出土資料に見出される差異、②そこから抽出・設定されたTK 217型式に見出される差異、という二つのレベルでの「差異」を、「型式差（時間差）」とするのか、「型式内の共伴関係

（バリエーション）」とするのか、ということ、改めて問う必要があると考えている。同様な問いを、TK 46型式（実見）・TK 48型式（一部実見）・MT 21型式（未見）についても立て、それぞれの枠組みを変更し組み合わせることができるかどうか、吟味する必要がある。吟味のためには、比較材料として田辺氏以降に大阪府が行った発掘資料（『陶器Ⅰ～Ⅷ』）をも活用することが必要であり、佐藤隆氏の再検討はそのような問題意識の下に行われた作業であろう。

ただし、佐藤氏が尾野善裕氏の所論に依拠して、「単一の窯において、型式（様式）の幅を大幅に超えた長期操業は想定しなくてよい」とする基本姿勢<sup>註7</sup>は、賛同できない。なぜなら、①ある任意の型式（様式）幅は一定ではなく、短期間であっても複数の型式にまたがる移行期に相当する場合がある、②一つの窯の操業が、開窯から廃窯まで連続した一つの時間幅で収まるのか、一定期間を置いて断続的（数年おき、10数年おき、数10年おき等々）に行われたのか、ということは未検証であり、無条件に前者を前提にすることはできない、③遺構のサイクル（使用・廃絶・埋没）を限界とした土器群の設定は、考え方としては遺構の数だけ無限にでき、それらを縦横斜めに並べることは可能だが、それが編年の単位（型式・様式）たり得るかどうかは、編年の仕組みをどのように構想するかにかかっており、そこを不問にして無条件に設定できる天与の概念ではない、からである。

### 3. 単系列なのか

ところで、蓋杯における形態・技法の変化をたどる際に、陶器3編年が概ね共通している前提がある。それは、変化の過程を単系列の組列として図示し、記述している点である。あるいはそこまで明確にしていない場合でも、少なくとも並列的な複数の組列は念頭には置かれていない、と言うことはできよう。

TK 217号窯の古墳時代タイプ杯身は、「たちあがりをもつ杯身の終末にちかい形態」（『Ⅰ』）をより顕著に表す資料が増加した現在、同タイプの最終形ではないように見える。しかし、「最終形ではないように見える」ところが曲者で、そう見るためにはTK 217号窯杯身の後に、より「終末にちかい形態」を置き、両者を一つの型式組列に位置付けることができる、という前提理解がなければならない。本当にそう見てよいのだろうか。

例えば陶器窯の資料ではないが、讃岐地方の同タイプ最終形と見られる杯身には、①たちあがり径、②たちあがり・受部形態、③底部調整（回転ヘラ削り・回転ヘラ切り不調整）に、おそらく生産地を単位とした異なるバリエーションが見出せる<sup>註8</sup>。これらに上記①～③のいずれかの要素を基準にして、単一の型式組列を設定しようとする、必ず他の要素と矛盾することとなるため、これらは複数の組列に属すると捉えた方が妥当である、と考えているところである。

未報告分を含めてTK 217号窯の杯身を実見すると、TK 209号窯との差異は、当初、田辺氏が

	①	②	③
T K 217	10.2 ~ 10.7	たちあがりやや短・内傾	ヘラ削り
T K 79	9.2 ~ 12.6	たちあがり短・内傾	ヘラ切り不調整
T G 64	8.5 ~ 11.5	たちあがり短・内傾	ヘラ削り
T G 206	8.0 ~ 9.5	たちあがり短・内傾	ヘラ切り不調整
T K 310	9.2 ~ 11.1	たちあがり短・内傾	ヘラ削り

表 1 古墳時代タイプ蓋杯の属性

指摘したほど大きなものには見えず、連続的な関係としても違和感ない。『大成』で田辺氏がT K 209 型式とT K 217 型式を連続的に捉えるようになったのも、同様な見解にもとづくのではないかと考えられる。問題はT K 217 号窯に続く「終末にちかい形態」を指定できるか、ということである。例えばT K 79 号窯、T G 64・206 号窯の古墳時代タイプの杯身であるが、上記①～③の要素を比較すると、表1のようになる。たちあがり径がT K 217 とさほど変わらないT K 79 では、受部が上外方に内湾する形態、深手で平底気味の全形、といった点にT K 217 とは異なる形態的特徴を見出せ、底部は回転ヘラ切り不調整である点もT K 217 とのギャップが大きい。T G 64 はT K 217 よりもたちあがり径がやや小振りであり、浅い全形はT K 217 からの延長に理解できるが、受部形態はT K 79 的にも見える。底部は回転ヘラ削りであり、T K 217 よりも狭い範囲に施される。T G 206 はT K 217 よりも完全に小口径であり、受部はT K 79・T G 64 に近く、底部は回転ヘラ切り不調整と見られる。少ない検討事例ではあるが、これらから想定される組列は、以下のようなパターンがある。

<1> 受部・全形の形態変化を組列横断の共通した変化要素と見なした場合

T K 217 → T K 79 (ヘラ削り省略) → T G 64 (ヘラ削り復活) → T G 206 (ヘラ削り省略)

<2> 受部の形態変化を組列横断の共通した変化要素と見なした場合

T K 217 → T G 64 (縮小化) → T G 206 (縮小化・ヘラ削り省略)

T K 79 (ヘラ削り省略)

<3> 底部調整の連続関係を重視した場合

T K 217 → T G 64 (縮小化、ヘラ削り)

T K 79 → T G 206 (縮小化、ヘラ切り不調整)

<1> については、T K 79・T G 64 の順を入れ替えても今度は口径の縮小化が逆転することになるため、やはり単系統での把握は難しいと考える。

また、T K 310 ではT K 217 に近似した杯身と、T G 64 に近似した杯身があり、いずれも底部回転ヘラ削り（中央部にヘラ切り痕残すものあり）を施すことから、あえて言えば「T K 217 → T K 310 → T G 64」あるいは「T K 217 → T K 310・T G 64」のような組列（？）も想定できるかもしれない。しかし、T K 310 で伴出したかえり付蓋の口縁部形態には、T G 206 とは明確な差異（かえりの突出度）があり、このタイプに関しては「T G 206 → T K 310」という先後関係が最も妥当な解釈と言える。すると、伴出する古墳時代タイプは「ヘラ切り不調整 → ヘラ削り」という、または

逆転した並びになってしまう。

このように見てくると、古墳時代タイプ蓋杯には、形態・技法両面で複数の系統があると判断した方がよく、その系統を見極めた上での型式組列の設定、という作業が課題となってくるであろう。

同じことは、高台付杯身についても言えるようであり、田辺氏が『I』で分類した杯Bにおける高台の2者（①厚く外方へふんばったもの、②下方へ垂直にのびる高台の端部のみ、極端に外方へ屈曲し、先端を単に丸くおさめたもの）は、そのまま後続の資料群でも認められるため、系統を考える際の指標となり得ると考える。

#### 4. 台付椀から高台付杯への変化をたどれるか

西弘海氏は、高台付杯身（西氏分類の杯B）の祖型を台付椀に充てる見解を示している（西1978・1982、ともに西1986に収録）。脱稿の早かった西1982では埼玉県柏崎4号墳出土資料（飛鳥I）、その後にとめられた西1978では古宮遺跡（小墾田宮推定地）出土資料（飛鳥I・II）が、それぞれ図示されており、西1982では「台付椀B」、西1978では杯Bの「祖型」と呼んでいることから、台付椀Bから杯Bへとスムーズに移行したようなイメージをもっていたと推察される。ちなみに柏崎4号墳例はT K 209 号窯に類例を見出すことができ、古宮遺跡例は今回実見したT K 217 号窯未報告分に類例を確認できるが、西氏が図示したようなかえり付蓋（T K 217 号窯『I』21）は伴わない、無蓋形態と見る方が他の類例とも整合的であろう。またこれらは、体部に2条の沈線を施しており、無高台の有蓋鉢形杯と共通する特徴をもつ。したがって本来は、「有沈線+やや深手鉢形」を基本形とした無高台・有高台の2グループの集合体として捉えるのがよい、と考える。

ところで西1978・1982の変遷図は、それが完成した形で示されると、「そんなものか」と違和感なく受け止めてしまいがちである。しかし、「祖型」もしくは台付椀と定型的な西氏杯Bとの間には、①杯部に施された沈線の有無、②高い脚部と低い高台の差異、という点で埋め難い懸隔が存在する。飛鳥や難波の土器に依拠する限り、台付椀からいきなり定型的な西氏杯Bが出現するようには見えるのである。1990年代以降の古代の土器研究会での議論を嚆矢とする7世紀土器の再検討においても、西氏杯Hの変遷・終末については微細なレベルでの分析がなされているが、西氏杯Bの成立過程については不思議なほどに議論が低調なもの、飛鳥での資料状況からすればやむを得ないのかもしれない。しかし、飛鳥・難波より西側の世界に目を向けると、北部九州を一つの核とした瀬戸内周辺地域において、西氏が構想したような「台付椀から杯Bへ」という動きを様々な形で見出すことができると考える。

詳細は別稿に譲るが、以下の諸点は重要な知見である。

- 1) 筑前・牛頸窯跡群においては、舟山良一氏編年のIV A期（陶邑窯との並行関係の特定は難しいが、古墳時代タイプはT K 209・217に近似し、宝珠つまみ・かえり付蓋は見られない）において、朝鮮半島（新羅）の土器に



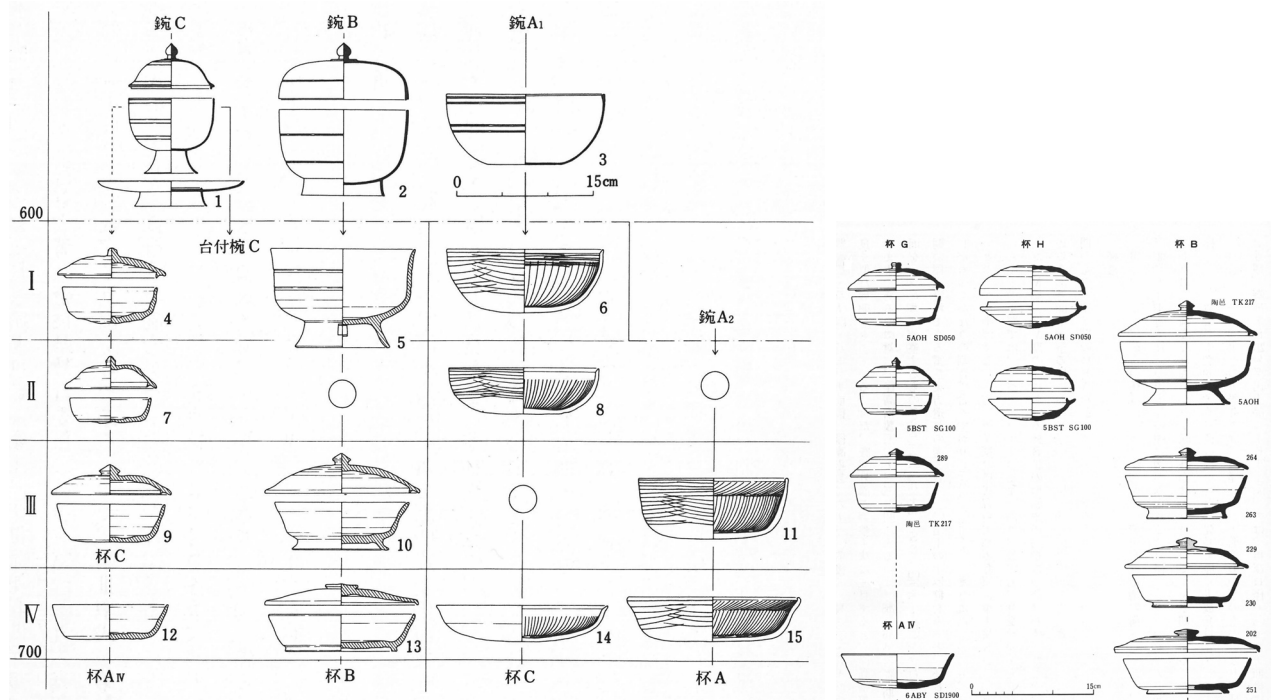


図1 西弘海氏による飛鳥編年 (左: 西 1982 右: 西 1978)

- 近似し、体部に段か突帯もしくは沈線を入れる無蓋の高台付鉢形あるいは台付碗が認められること。
- 2) 豊前・天観寺山窯跡群で、牛頸窯よりもやや後出的な古墳時代タイプ蓋杯に伴って（宝珠つまみ・かえり付蓋は伴わない）、体部に沈線を入れる無蓋の台付碗（というか、全形は沈線を除けば西氏杯Bと言ってもよい）が認められる。脚部（高台）は、ハの字形で直線のに延びるタイプと、やや長めに裾部が強く開くタイプがあること。
  - 3) 豊前では、宝珠つまみ・かえり付蓋とセット関係をなし、台付碗を想起させるような特徴的な高台付杯が複数タイプ見られ、そのうちの一つの系統はかえり無蓋を伴う段階まで継続すること。
  - 4) 伊予（予讃国境の東予地方）の大小谷谷窯跡では、TK 217・TG 206 に近似した古墳時代タイプ蓋杯に伴って、長くハの字形に開く特徴的な脚部を伴う有蓋台付碗（蓋はかえりが口縁端部よりも下方に突出するもの主体）が見られること。
  - 5) 伊予・松山平野の駄馬姥ケ懐1号窯跡では、古墳時代タイプを伴わずに宝珠つまみ・かえり付蓋（かえりは口縁端部と同じか上位で収まる）とセットになり、体部下端に沈線（段）を施し大きくハの字形に踏ん張る高台をもつ杯身が見られること。
  - 6) 讃岐では、台付碗から連続的にたどれ、豊前（上記3）との関係も検討課題となる有蓋高台付杯身（蓋はかえり付）が見られる。また、小谷1号窯跡では、駄馬姥ケ懐1号窯跡の高台付杯身からの系譜をたどれる可能性がある

有蓋杯身（ただし沈線状の痕跡的な段もしくは稜となる、蓋はかえり付）が見られること。以上の諸点は、飛鳥・難波・陶呂窯だけでは、高台付杯身の生成過程は理解できないことを示しているのではないだろうか。陶呂T G 64号窯跡出土の台付碗は、上記1・2に近似するが、報告資料数では陶呂より九州の方が圧倒的に多い。また、飛鳥・難波そして陶呂窯・千里窯では、むしろ無蓋高杯で超・短脚のタイプが出現・普遍化し、一部に有蓋化するものもある。これも台付碗を代替するような「地域性」と捉えてはどうだろうか。以上から、台付碗普及の動きは陶呂窯発ということではなく、北部九州諸窯から傾斜的に畿内へと伝わった可能性を考えてもよいように思う。

いずれにしても、北部九州・畿内を含めた瀬戸内沿岸の西国の資料群からは、①無蓋の台付碗の段階、②台付碗の系譜を引き、有蓋で長く踏ん張る高台を伴う杯の段階、③高台が低下した定型的な高台付杯の段階、という流れは想定してよいであろう。「台付碗から高台付杯への変化」は、北部九州を中心とした西国各地で①の動きが始まり、その後いくつかの連続関係の下に②を経て、最終的に③で斉一化が進む、という筋書きが描けるとようである。そして、畿内は③の動きへの関与、つまり西国での先駆的な流れに最終的な形を与えた、という役割にその特質が見出せるのではないだろうか（図3）。

## 5. どのように理解できる可能性があるか

杯蓋各タイプにおける複数系統の存在、台付碗から高台付杯への段階的な変化、といった観点を基調に、改めて7世紀陶呂窯須恵器の変遷を整理すると、以下のようになると思われる。もちろん

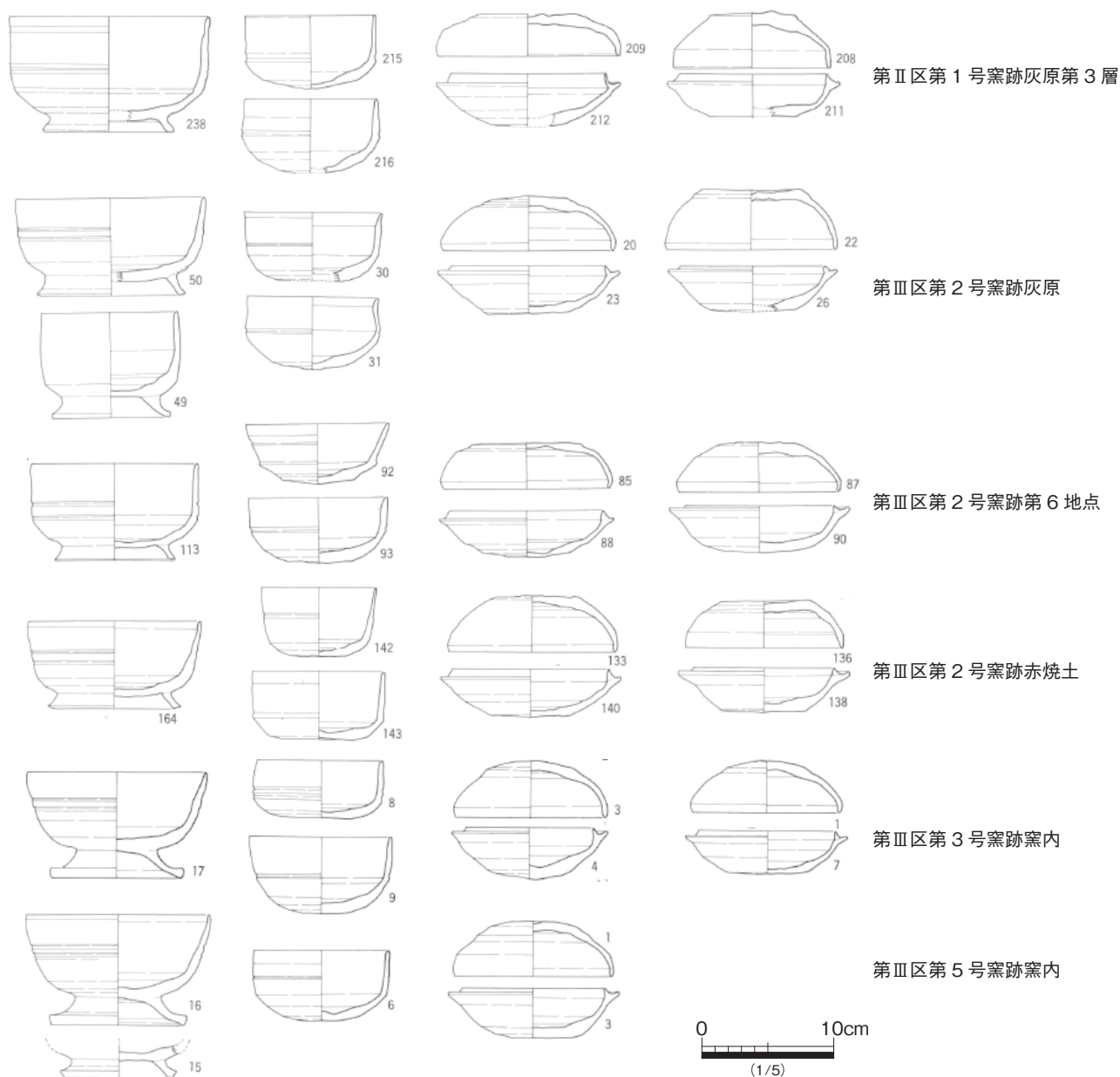


図2 豊前・天観寺山窯跡群出土の台付椀

これは、今後も陶邑窯と西国各地の須恵器を実見していく過程で更新されていくはずであり、現段階での試案であるが、考えを整理し課題を明確化するための仮説作業として、提示しておく(図4)。なお筆者は、不確かな「出土実体」を前提とするのではなく、遺物の系統関係を反映した組列に編年の意味を置くため、型式的操作は躊躇せず行うべき(当然、層位的関係の検証は必要)と考える。

#### A期(T K 209)

- ・高台付杯への祖型としての台付椀(脚部に方形透かし)出現
- ・古墳時代タイプの蓋杯(奈文研杯H)には、口径にかなり幅がある(意図的な「法量分化」

かどうかは疑問)ものの、形態的には相似形を呈する

#### B期(T K 217、T K 79)

- ・有蓋無高台で沈線を施す鉢形の杯の出現(T K 217未報告)。また底部が丸く分厚く突出する有蓋無台杯(奈文研杯G)出現
- ・鉢形の蓋・身には文様帯を伴うものあり(T K 217、出現はA期以前まで遡る<sup>註9</sup>が祖型が陶邑窯にあるかどうかは不明)
- ・古墳時代タイプの蓋杯には、底部・天井部を回転ヘラ削り主体の系譜(T K 217)と、回転ヘラ切り不調整主体の系譜(T K 79)がある



7世紀における西国の台付椀・高台付杯身の変遷 ●印 異形形態

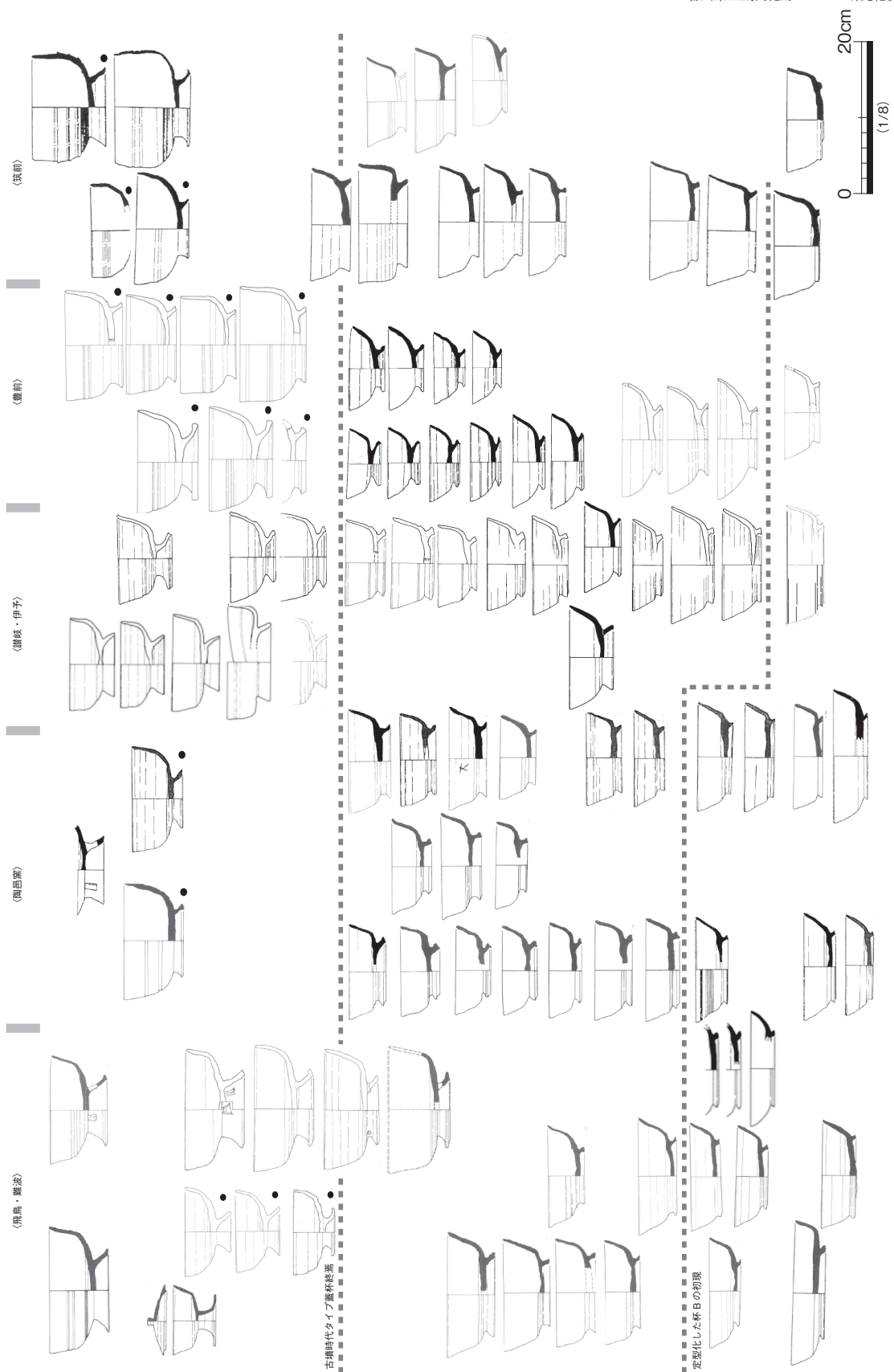


図3 西国における杯B変遷図



図4 陶器窯跡須恵器変遷イメージ図



・口縁部を外反させる特徴的な皿の出現

#### C期 (T G 64・206、T K 46)

- ・逆転形態の鉢形杯蓋の口径縮小化
- ・北部九州的台付碗出現する (T G 64) が、僅少かつ生産窯も限定的なものにとどまる
- ・特徴的な皿に脚台を付した高杯

#### D期 (T K 310)

- ・かえり付蓋のかえり短くなる (口縁端部より上位)、口径最小
- ・平坦な底部から明瞭に屈曲して外反気味に立ち上がる無台杯 (奈文研杯 G or A) 出現し、無台杯の法量分化始まるか
- ・この期をもって古墳時代タイプ蓋杯消滅。口径の大振りな古墳時代タイプは、B期か

#### E期 (T K 217、T G 11)

- ・有蓋で長い高台をもつ杯身出現 (台付碗の雰囲気残す)
- ・高台付杯身の出現により、有蓋杯の法量分化が進展

#### F期 (T K 46・217、T G 222)

- ・高台付杯身の底部平坦化、高台やや低くなる
- ・高台付杯に大口径が加わる (法量分化?)

#### G期 (T K 48・304、M T 21)

- ・蓋のかえり無が出現し、かえり有と併存
- ・高台付杯身の高台低くなり定型的なものになる

#### H期 (M T 21・T K 48)

- ・蓋のかえり消失、高台さらに低くなる
- ・平底の無蓋無高台 (奈文研杯 A) 増える

A～H期の措置は、これまでの「型式学的」な序列設定と何ら変わらないように見える。それはその通りであり、①T K 217・T K 46・T K 48・M T 21 各窯の出土資料を、完結した単位が前後に連なるようなあり方から、型式の特徴を重視して相互に入り組んだ構造の序列として捉えた、②古墳時代タイプの蓋杯の最終形に2つ以上の系譜が存在するものとしたこと、③高台付杯身の出現経緯を西弘海氏が示したような台付碗からの型式学的変化として整理したこと、等をただ強調したに過ぎない。

いずれにしても、陶邑窯編年提示後の1980年代以降、全国各地において遺構論と遺物論との整合を目指して試案の提示が繰り返されてきた7世紀の須恵器編年からの逆照射に比べ得るような、一層の編年論の深化が陶邑窯に求められていることは、間違いないであろう。新出資料による細分化が可能なように見える状況下で、「今さらT K 217号窯にこだわる意味があるのか」といぶかる見方もある。しかしT K 217号窯 (型式) をめぐる言説には、単純資料の抽出にとどまらない、多くの今日的課題が内包されている。と筆者は考える。各地域の編年を考えるための重要な素材として、T K 217・T K 46・T K 48・M T 21 各窯出土資料を実見し、それぞれの地域資料に引き付けつつ考察されること<sup>註10</sup>を、お勧めしたい。(2023.10.9)

#### 主要参考文献

- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ  
田辺昭三 1980『須恵器大成』角川書店

中村浩 1976「大野池、光明池地区の須恵器編年に関する諸問題」『陶邑 I』大阪府教育委員会

中村浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑 III』大阪府教育委員会

西弘海 1986 (初出 1978)「7世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』真陽社

西弘海 1986 (初出 1982)「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真陽社

註1 こうした事態は、どの種別・時代の編年案においてもしばしば経験することであるが、「年代のものさし」として古墳編年にも前提とされている陶邑編年の確固としたイメージとは対照的に、その内容の理解は「口伝」に近い部分もある。

註2 佐藤竜馬 1997「7世紀讃岐における須恵器生産の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 V 特集・7世紀の讃岐』

註3 佐藤竜馬 2000「讃岐・川津地区遺跡群の動向」『古代文化 52-6 号 特集 南海道諸国の官衙遺跡—調査研究の現状と課題』古代学協会

註4 田辺昭三 1981「[注]10 窯式編年について」『須恵器大成』角川書店

註5 いずれの窯跡も、現在のところ未報告であり、その内容をうかがい知ることはできない。

註6 中村浩 1976「大野池、光明池地区の須恵器編年に関する諸問題」『陶邑 I』大阪府教育委員会の第22表 (242頁) にイメージが図示されている。

註7 佐藤隆 2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年—陶邑窯跡編年の再構築に向けて—」『大阪歴史博物館研究紀要 第2巻』7頁

註8 佐藤註2文献でも述べたが、これを考える際に畑中英二氏の所論が参考になった。

畑中英二 1996「T K 217 型式併行期における須恵器生産技術の保存と伝播 (近江・山城地域の杯H製作技術の観察から)」『滋賀考古 第15号』滋賀考古学会

註9 岡山県倉敷市王墓山古墳出土須恵器には、蓋・身ともに沈線で区画された文様帯に刺突列点文を施すものが4セットあり、有沈線の杯身の嚙矢と考えられる。

山本雅靖・間壁忠彦・三木文雄 1974「王墓山古墳 (赤井西古墳群1号)」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会

註10 「当てはめ」でなく、各地域の資料を豊かに把握するために。また陶邑窯を絶対的な存在ではなく、少なくとも西国全体の中で相対化し、その意義を考えるための手がかりとして。それには、北部九州から瀬戸内を経て畿内までを対象とし、各地の編年の並行関係を丹念に踏まえた「広域編年」の構築が不可欠であり、陶邑窯編年の再検討が改めて求められるところである。